

地域から「信頼」という言葉が消えた

保育園の一時保育、ベビシッター、ファミリーサポート制度など、地域で子どもを預けられる場合は、ここ数年でかなり充実。だがそんな中、実際には「子どもを預けられない母親たち」が増えている。子どもを他人に預けることへの後ろめたさは依然としてあるが、人を信頼することができず、子どもを預けることに不安を抱く母親も多い。世の中にはおかしな人もいるし、個人情報悪用する業者も増えている。だが、極力面倒なことは避けたいという人も多く、隣近所のつきあいどころか、挨拶も、目を合わすこともなく、幼稚園や学校などPTAの会合にもほとんど出席しないという。これでは、地域とのつながりが希薄になる一方だ。



家庭や学校では、「人に声をかけられたら、黙って逃げなさい」「留守番をするときは電話に出ない、鍵を開けない」と、子どもたちに教えている。シヨッピングセンターやテーマパークでは、子どもに迷子防犯装置を装着。昔のような迷子放送がなくなったのも、個人情報問題という。

夏休みを前に子どもが持ち帰ったプリントには、こう記されていた。「公園で一人で遊んではいけません」「知っている人も『悪い人』かもしれない。話しかけられても絶対に話してはいけません」

これが当たり前前の社会だとしたら、そんな中で子どもたちの心はどう育つのだろうか。ITや情報社会を背景に陰湿な事件が多発。私たちの身近に危険がいつばい潜んでいるのも事実だが、反対に、地域には素晴らしい大人もたくさんいるはずだ。だが今は、そんな大人たちが、気軽に子どもに声をかけることさえできなくなっている。

特集 地域をつなぐ新しい保育のカタチ

お母さん大学の応援団

子守隊



岩佐俊一さん 1942年山口県出身。服飾店経営後、183ファッション研究所長、NPOサングリーン理事、横浜マレットゴルフ協会理事等を兼務。

「託児隊」ではなく「子守隊」



子どもを預けて講演を聞いたり、活動したりすることに、初めから迷いがあったわけではありませぬ。預け先への迷いではなく、子どもに負担をかけてまで、私は今、それをやる必要があるか？という迷いでした。

昨年9月、そんな迷いもありながら、「この新聞をつくっている人に会いたい！」という思いのほう強く、初めて息子を、おばあちゃん以外の人に、2時間預けました。

このときの講演で、藤本さんはこんなことを言われました。「お母さんから離れて、子どもはお母さん以上に学んでいるんだよ!」。預けることは、子どもを犠牲にすることではなく、日々学び、成長していく子どもにとっては、それもまた、新たな刺激なのだとわかり、預けることへの迷いが少し解消しました。

その後もお母さん大学事務局(編集部)のある横浜に住んでいる利点を生かし、「子守隊が出ます」と言われれば、積極的に親子共々学びの時間を持たせていただいています。

すごいと思うのは、「託児隊」ではなく「子守隊」というところ。これは大きな違いです。子守隊の発足は、お母さん大学ならではの出来事だと思います。子どもを託す場ではなく、「大人が子どもを見守っているよ。見守っている場で、子どももいろいろ学んでいるよ。だからお母さん、あなたも安心して、学んでおいで」。そう言っていたような。「託児」では感じられない、双方向の心のつながりを、私はそこに感じています。

2歳前の息子にとって、お母さん(私)と離れることは、大きな勉強でしょう。子どもに全く負担をかけていないとは言いきれませぬ。でも、その時間が終わったあとの息子は、いつも、とてもいい顔を見せてくれるのです。自信と誇りとでもいうのでしょうか、しっかりとした学びがあった表情を。

私自身も、子守隊の皆さんにサポートされていることで、「しっかり学ばねば!」と、一層励まされています。そして、「いつか私自身に余裕ができれば、子守隊として次に続くお母さんをサポートできれば…」そんなことまで感じさせるのが、「子守隊」の素晴らしいさだと思えるのです。(渡邊智子)



子どもを預かるなら真剣勝負と、覚悟を決めてスタートした。最初の頃は、充実感を得ることはできなかったけれど、少しずつコツやタイミングがつかめてきて、ぼく流の子守りをすればいいんだと思えてきた。子どもを抱っこしていると、ある瞬間、子どもの体の力が抜ける時がある。それは、ぼくが子どもに仲間と認められた瞬間か? 「ああ、やってよかった」とぼく自身思えた瞬間でもある。よく考えたら、わが子さえろくに育てていないのに、他人様の子どもの面倒を見るなんて考えられないこと。だからこそ、ぼくにとって、子守りは冒険のようなもの。子どもは泣いたり、お腹を空かせたり、眠くなったりと、まさに生身の人間と触れ合っている感じ。男は背中が勝負という。子どもが安心する背中を持つ男、いや、じじいになりたい。(岩佐)



こう見えて、ぼくはもともと子どもが好き。町でも子どもを見かけたら気軽に話しかけるタイプなので、子守りもけっこう得意だよ。でもそうはいっても、こんなに小さい子を見るのは久々だから、最初は試行錯誤。保育のコツは、子どもをよく見ること。とにかく、子どもの目を見たら、子どもが何をしたいのか、何をしたら喜ぶのかわかる。子どもに全身で喜びを表現されると、たまらないね。12年前だけど、女房がスポーツクラブで若いママと知り合い、その子どもを頻繁に預かっていた。ぼくも土日に一緒に遊んだりして過ごしていたが、親とは違う子育てをと、心がけていたね。今、中学2年になったその子を見ると、明らかに、乳幼児期の経験が生きている。できれば、3~4歳の子どもたちを、外で思いっきり遊ばせたいね。(三谷)



三谷進さん 1941年石川県出身。大手化学会社をリタイア後、NPOサングリーン副理事長、横浜マレットゴルフ協会会長等を兼務。



漆崎達郎さん 1934年茨城県出身。乳業メーカーをリタイア後、囲碁クラブ、男声合唱団、和太鼓集団などに参加。横浜開港150周年イベントボランティアに登録、活動中。

子どもの個性や感性との出会いは新鮮で楽しいね。初めての子守りはどんなものかと思っていたが、思いのほか楽しく、疲れは全く感じなかった。ぼく自身のペース、いつもの調子でやれたと思う。でも、普段使っていない神経は使ったかもしれない。疲れというよりは、興奮かな。実は、これまで何度か「子守隊」のお誘いがあったが、正直なところ、「俺はいいや」とお断りしていた。けど、藤本親分の顔がちらついで、仕方なく参加した。ところが、子守りをやってみたら、「ハマリそう」という感じ。何しろ一人ひとり子どもの個性が面白い。いじめる子、抵抗する子、いじめられてもポーツとしている子、見ているだけで楽しいね。親の顔が浮かんできたよ。ある子はずっと泣いていて、どうしていいかわからなかった。しょうがないから正面向き合って、こっちはウエーと泣いたんだ。そしたら、その子は泣き止んで、キョトンとしてぼくを見ていたよ。その子と心がひとつになれたようであれしかったな。(漆崎)

人間形成に影響するこの時期、子どもにいろんな経験を。



大谷聡穂さん 1963年神奈川県出身。幼稚園教諭。保育士として公共施設、各子育て支援拠点で活動中。お母さん大学託児課リーダー。

みんなできてる、最高の保育。